

南半球便り（その 73）：アーティストが深める絆

5 月 4 日

時の過ぎゆくのは早いもので、この 4 月をもって外務省に入省して 39 年目に入りました。でも、大使をやって初めて分かることが山とあります。日豪を繋ぐ絆を深める上で芸術家や俳優が果たしている役割も、そのひとつです。

1. 人的交流の柱

日本とオーストラリアとの間の貿易・投資関係、安全保障面での協力など、両国間の協力は幾何級数的に広がり、深まる日々です。その中でも大事な柱の一つが文化交流であり、人と人との繋がりです。

豪州各地を回る中で、種々の式典に招待され、また、日豪の文化交流に携わる何人もの日本人・豪州人にお会いし、大いなる刺激とインスピレーションを頂戴してきました。

今日は、そのうちの何人かを紹介いたします。

2. 盆栽アーティスト・メグミ・ベネット女史

東京ご出身で、幼少期を疎開先の長野でも過ごされたベネット女史に最初にお会いしたのは、シドニーの日本祭り「ジャパナルー」でのことでした。開会式が行われたタウン・ホールに並べられた数々の盆栽作品を案内していただいたのです。



左：シドニー北部、ベルローズにある盆栽園「Bonsai Art」の美しい盆栽

右：同盆栽園にて、ベネット女史と

実は、盆栽には格別の関心がありました。というのも、警察出向当時、茨城県警の何人もの同僚警察官が盆栽をこよなく愛好していたからです。警察官は、常在戦場。週末・休日といえども、いつ、事件・事故が発生するか分からない。私も、ゴルフ、山登り、海釣りは、いざという時に持ち場に駆けつけるのに時間がかかるので、御法度と言われました。そうした状況なので、自宅で大きなスペースを取らずにできる趣味として、盆栽に没頭する人が少なからずいたのです。

その後、ベネット女史がご主人、息子さんとシドニー郊外で経営されている盆栽園「[Bonsai Art](#)」を見学してきました。所狭しと並んだ「作品」の豊富さ、多彩さに目を見張りました。のみならず、自慢の子供を慈しむ母のごとく盆栽を語るベネット女史の優しい物腰と眼差しに、強く印象づけられました。



ベネット女史が盆栽について語るまなざしは、慈母そのもの

豪州には盆栽愛好家が多数いて、ニュースレターまで発行されているとのこと。鉢の中の小さな自然に没頭して、悠久の大自然と人間の関わりに思いを致し、日常の苦労や些事を忘れ去る。そこに国境は無いようです。

3. 陶芸家ポール・デービス氏

ポールを私に紹介してくれたのは、キャンベラ郊外のクインビアンズの工房で長年陶芸をされてきた京都出身のスウェン博江女史でした。モナシュ大学でスウェン女史から陶芸の手ほどきを受けたほか、萩で修行を重ねたユニークな経歴を有する陶芸家です。



NSW 州ミタゴンのストゥート・ギャラリーにて、ポールと

そのポールから、シドニーから車で約一時間かかるミタゴンのギャラリーで開催された
[個展](#)のオープニングに招待されたのです。時間がゆったりと流れているニュー・サウス・
 ウェールズ州郊外の裕福な住宅地での贅沢なひとときでした。ドイツのトーマス・フィ
 チェン大使夫妻もキャンベラから駆けつけていました。

【私のスピーチは[こちら](#)でご覧いただけます。】

それにつけても、ポールと握手した時のグローブのような手にびっくり。あの手で轆轤
 を回すからでしょうか。彼の作品には独特の迫力と逞しさを感じました。



左：展覧会の様子 右：同展覧会にて、スウェン博江女史と

4. パルバース三姉妹

米国出身のロジャー・パルバース氏とは、畠中篤元駐豪州大使の紹介で知り合いました。宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」を英訳したほどの日本語の使い手。映画「戦場のメリークリスマス」の助監督も務めた文化人です。

そのロジャーの三人の娘さんによる共同の展覧会がキャンベラ郊外で開かれました。アリス、ソフィー、ルーシーの「[三人姉妹](#)」によるモダンアートの展示は、実に興味に富むものでした。幼少期に京都で暮らしていたからなのでしょう。作品のそこそこに、日本的なものの影響を感じました。



キャンベラ郊外アーウォン・ギャラリーでの展覧会「三人姉妹」の様子
左上：長女・アリスの作品、右上：次女・ソフィーの作品、下：三女・ルーシーの作品



パルバース夫妻、パルバース家のソフィーさん（右から3人目）、
アリスさん（右から2人目）、ルーシーさん（右端）と

ソフィーはいずれ京都暮らしを再びしてみたいとのこと。日豪を繋ぐ大事な役割を担ってくれることでしょう。

5. ドライブ・マイ・カー

最後に触れておきたいのは、アカデミー国際長編映画賞（Academy Award for Best International Feature Film）を受賞した日本映画「ドライブ・マイ・カー」です。名作「おくりびと」以来のアカデミー賞を獲得しただけでなく、主演男優の西島秀俊さんは、私が中学・高校時代を過ごした桐朋学園の後輩。大いに楽しみにして、キャンベラの映画館に見に行きました。

三時間を超える長編ですが、ストーリー展開のみならず、俳優たちが要所で交わす台詞の深み・面白さ、心理描写の巧みさに唸りました。知り合いの豪州人、キャンベラ駐在の第三国大使を含む何人もから、「もの凄く良かった。」との評価を聞きました。そこで、チケットを入手して何人かの知人に配布することもしました。

この映画を見た豪州人は、日々の暮らしの中で日本人が何に拘り、何に悩んでいるかに理解を深めるとともに、描かれる暮らしぶり、街並み、自然に触れて興味を深めることともなるでしょう。結局人はどこでも同じという連帯感が生まれることもあれば、日本のユニークさに惹かれる縁ともなるでしょう。このような良質の映画が日本から提供されたことを大変誇らしく思いました。

6. ソフト・パワー

このように、盆栽にせよ、陶芸にせよ、絵画にせよ、映画にせよ、良質のものには、大使館の通常の広報活動や外交官のスピーチなどではカバーできない対象をとりあげ、より広範囲の人に「日本」や「日本的なもの」を提示しつつ、交流を担っていく力があります。

まさに、国家のパワーの一環としてソフト・パワーが注目される所以です。今後とも国際交流基金シドニー事務所など関係機関とも連携しつつ、日豪間の文化交流、人の繋がりをいっそう強化できるよう、お手伝いをしていきたいと思っています。

山上信吾